CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)によって測定されるエラー傾向と性格特性の関連

○大橋智樹*・行場次朗**・守川伸一*
(*㈱原子力安全システム研究所・**東北大学)

Investigation on relationships between personality and cognitive failure characteristics measured by CFQ.

○ OHASHI, Tomoki*・GYOBA Jiro**・MORIKAWA Shinichi*
(**Institute of Nuclear Safety System, Inc.・**Tohoku University)

１．はじめに

CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)は，Broadbent, Cooper, Fitzgerald, & Parkes (1982)によって考案された日常的な失敗経験の頻度をたずねる質問紙である．注意や認知の不十分さが原因と考えられる行動の失敗を記述した２５項目からなる質問文に対して,「非常によくある」から「まったくない」の５段階の評定を行わせ，その合計得点をもって行動や注意に関係する特性を測ることが目的とされる（Reason (1988)に CFQ についてのレビューがある）. 得点は, すべての項目で「非常によくある」と回答した場合に 125 点，すべての項目で「まったくない」と回答した場合は 25 点となる.

考案された当初の CFQ は，認知的な注意の一時的な状態を示していると考えられていたが，その後の研究で再テストにおける一致度がかなり高いことから(石田ら，1991 ほか), 行動や注意に関係する比較的安定した特性をあらわす測度として考えられている.

CFQ 得点の高い人は日常的なエラーの頻度が高く, 逆に, CFQ 得点の低い人は日常的にエラーを起こしにくい人であることが予想される．しかし，CFQ の得点とモーズレイ人格検査や CAS 不安診断検査との相関が高いことが明らかにされており(Broadbent, et al., 1982; 石田ら, 1991; 山田, 1991), これはすなわち，不安傾向の高い人は CFQ の得点も高くなることを意味すると考えられている. これらのことから, CFQ が単に不安傾向をあらわしているに過ぎないという指摘もある（石田ら, 1991 など）.

一方，実験室実験によって実際の行動を測定し，その結果と CFQ の得点との関連を検討した研究も行われている．たとえば，Broadbent, Broadbent, Jones (1987)は，CFQ 高得点者は刺激探索課題に, 低得点者は注意集中課題にそれぞれ適した処理方略を持つことを明らかにしている. また, 山田(1993)も CFQ の高得点者と低得点者の間には行動特性が異なることを明らかにしている．これらは, CFQ の示すエラー傾向が実際の行動と何らかの関連があることを示唆すると考えられる．しかし，実際のエラー傾向との直接の関連は，いずれの研究でも示されておらず，CFQ がどのような特性を反映しているのかは，いまだに明らかにされていない.

本研究は, CFQ と一般の性格検査との関連を分析することで, CFQ がどのような特性を反映しているのかを明らかにすることを目的とした．具体的には，同一の被験者に対し，CFQ とほかの性格検査を行い, それらの関連を分析した. 比較のための性格検査としては, 事故親和性（交通事故への遭遇しやすさ；事故多発傾向）を測るものとして Traffic Unsafety Personality Inventory （交通不安全人格検査；TUPI）を，また，一般的な性格特性を測るものとして矢田部・ギルフォード性格検査（YG 性格検査）を用いた．本研究では，これらの検査と CFQ との相関を検討することで CFQ の測るエラー傾向の特性を解明する試みを行ったものである．

２．方法

2.1. 使用した質問紙：

CFQ の測定するエラー傾向の特性を明らかにするために， YG 性格検査と TUPI を用いた．

TUPI は，東北大学と㈶自動車事故対策センターとが共同で開発し，事故多発者を選別する目的で使用されている人格質問紙である（丸山, 1981）．120 項目の質問への回答を分析することで，感情の安定性(E)・協調性(C)・気持ちのおおらかさ(G)・他人に対する好意(D)の各尺度および, これらの各尺度の総計で安全運転に関わる総合指標(T), 几帳面さの尺度(A), さらに, 職場や現在の境遇に対する満足度の尺度(S)を測定する．

YG 性格検査は，A類（平均的な性格），B類（情緒不安定・活動的），C類（情緒安定・非活動的），D類（情緒安定・活動的），E類（情緒不安定・非活動的）の５つの性格類型に分けることができる．本研究においては，これらの５つの類型の他に，類型を形成する下位カテゴリーである 12 個の性格特徴（Table 1参照）に基づいた分析も行った．

Table 1：YG 性格検査で調査される 12 個の性格特徴

記号	尺度	記号	尺度
D	抑うつ性	Ag	攻撃性
C	気分の変化	G	活動性
I	劣等感	R	楽観度
N	神経質	T	思考的向性
O	客観性	A	支配性
Co	協調性	S	社会的向性

2.2. 調査対象者：

調査対象者は, ある民間企業に勤務する 22 才から 54 才までの会社員 59 名（平均年齢 39.9 才）である．CFQ, YG 性格検査, TUPI を, 記入方法を記述した用紙とともに配布し, 後日回収した．

３．結果

記入の不備などのため，４名の被験者を削除し, 分析は５５名のデータによって行った．

3.1. CFQ について

CFQ 得点の度数分布図をFig. 1に示す．平均値は 51.44，標準偏差は 11.24 であった．

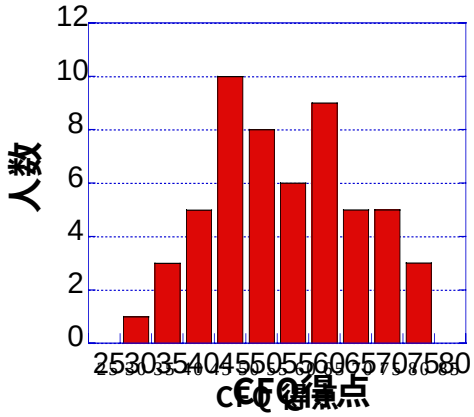


Fig. 1：CFQ 得点の度数分布

3.2. CFQ と TUPI の相関関係

CFQ 得点と TUPI の各尺度の相関をTable 2に示す．おおらかさ(G)，職場や境遇への満足度(S)を除く, すべての尺度に負の相関がみ

とめられた．

Table 2：CFQ 得点と TUPI の相関

	感情の安定性	協調性	おおらかさ	他人への好意
CFQ	-0.31*	-0.16*	-0.13	-0.33*

態度尺度	職場満足	総合指標
-0.34*	-0.00	-0.39**

+:p<.1, ＊:p<.05, ＊＊:p<.01

3.3. CFQ と YG 性格検査の相関関係

YG 性格検査における類型を決定する直接の数値である系統値と CFQ 得点との相関係数を求めると，Table 3のようになる．B系統値を除くすべての系統値と CFQ 得点の間に有意な相関が見られた．

Table 3：CFQ 得点と YG 系統値の相関

	E系統値	C系統値	A系統値	B系統値	D系統値
CFQ	0.25+	-0.27*	0.34*	-0.10	-0.33*

+:p<.1, ＊:p<.05

YG 性格検査の 12 個の性格特徴と CFQ 得点との相関をTable 4に示す．抑うつ性(D)・気分の変化(C)・客観性(O)・協調性(Co)に正の相関がみられ，攻撃性(Ag)・活動性(G)・思考的向性(T)・社会的向性(S)に負の相関がみられた．

Table 4：CFQ 得点と YG 性格特徴との相関

性格特徴	D	C	I	N	O	Co
CFQ	0.39**	0.31*	0.22	0.16	0.36**	0.30*

Ag	G	R	T	A	S
-0.23+	-0.27*	-0.06	-0.34*	-0.18	-0.23+

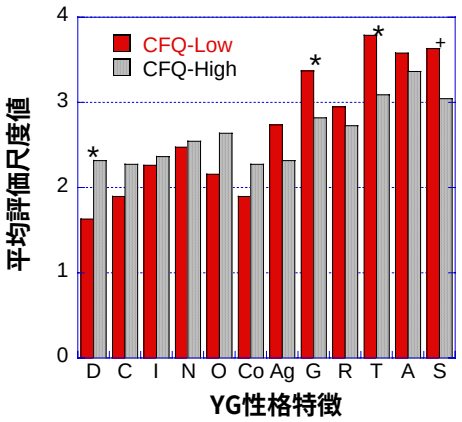
+:p<.1, ＊:p<.05, ＊＊:p<.01

3.4. CFQ 高得点群と低得点群の比較

CFQ 得点を基準に，上位 19 人と下位 22 人を抽出し，これら 2 群の YG 性格検査および TUPI の指標を比較した．

CFQ 得点は高得点群で 63.0，低得点群では 39.7 で，t 検定の結果，両群に有意な差が認められた (t=-13.9, p<.01).

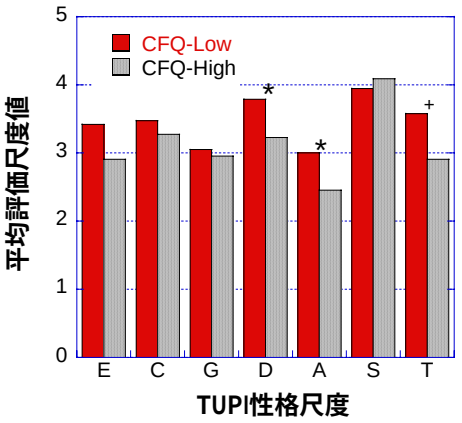
YG 性格検査の性格特徴を高得点群と低得点群で比較した結果をFig. 2に示す． t 検定の結果，抑うつ性(D)，活動性(G)，思考的向性(T)で有意な差がみられ，社会的向性(S)でも有意な傾向が示された．抑うつ性においては，CFQ 高得点群の方が高い値を示したが，それ以外の性格特徴においては低得点群の方が高い傾向を示した．



+:p<.1, ＊:p<.05

Fig. 2：YG 性格特徴の CFQ 高群・低群比較

次に, TUPI の各尺度における CFQ 高得点群と低得点群を比較した結果をFig. 3に示す．t 検定の結果，他人に対する好意(D)，几帳面さ(A)に有意差が，総合指標(T)においては有意傾向がみとめられ，これら差のあったすべての尺度において CFQ 高得点群の方が高い値を示している．



+:p<.1, ＊:p<.05

Fig. 3：TUPI における CFQ 高群・低群比較

４．考察

TUPI において，感情の安定性(E)・協調性(C)・気持ちのおおらかさ(G)・他人に対する好意(D)の合計によって事故多発者を予測する総合指標(T)は, 実際の交通事故との相関が確認されている．本研究では，この総合指標(T)と CFQ 得点とに強い相関が認められ，また, CFQ の高得点群と低得点群の間に総合指標に有意傾向が示されていることから，CFQ の得点から実際のエラーを予測できる可能性が示唆された．このことは，TUPI のすべての指標で，有意差がないものでも一貫して CFQ 低得点群の方が低い値を示していたことからも支持されるだろう.

一方で， YG 性格検査の性格特徴と CFQ の得点との相関や，群間分析の結果から，活動性の高い人は CFQ 得点が低くなる傾向や抑うつ性の高い人は CFQ 得点が高くなる傾向が示されていることから，従来の研究で示されてきたように不安傾向との関連もみとめられる.

しかし，YG 性格検査において平凡な性格特性をあらわす A 系統値と CFQ 得点との間に相関がみとめられるなど, CFQ の示す特性には未知の部分が多い．今後さらなる検討が必要であるといえよう.

５．まとめ

本研究は, CFQ の測定するエラー傾向が具体的にどのような性格特性に関連があるのかを検討するために行った.

対照検査として用いた YG 性格検査および TUPI の分析から，CFQ の得点が実際の交通事故の発生と関連がある可能性が示され，単に不安傾向を測っているだけではないことが示唆された.

６．引用文献

Broadbent, D. E., Cooper, P. E.., FitzGerald, P., & Parks, K. R. (1982) The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, **21**, 1-16.

Broadbent, D. E., Broadbent, M. H. P., & Jones, J. L. (1986) Performance correlates of self-reported cognitive failures and of obsessionality. *British Journal of Clinical Psychology*, **25**, 285-299.

石田多由美・白澤早苗・原口雅浩・箱田裕司（1991） 認知的失敗と注意－日本語版 CFQ 作成の試み－ 九州心理学会第 52 回大会発表抄録

丸山欣哉 (1981) 心理適性診断による助言指導法 自動車事故対策センター

Reason, J. T. (1988) Stress and cognitive failure. In Fisher, S., & Reason, J. T.(Eds.), *Handbook of life stress*, Cognition and health. Chichester: Wiley, 405-421.

山田尚子 (1991) CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)に関する検討(1) 甲南女子大学大学院心理学年報，９，1-20.

山田尚子 (1993) CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)とターゲットに対する探索. 注意の焦点づけ方略との関係 心理学研究, **63**, 414-418.

７．付記

本研究の実施にあたっては, 安倍清和氏（東北大学大学院文学研究科）と大槻孝介氏（東北大学文学部）の協力を得た．記して感謝する.